

史学科二三年間の教えと学びを振り返って



義江 明子

私が帝京大学史学科に助教授として赴任したのは一九九二年四月のことだが、その前に三年間非常勤講師として日本古代史の特講・演習・卒論を担当していた。したがって、それもあわせると二五年間、この八王子キャンパスに通い続けたことになる。定年退職の日を目前にしてあらためて振り返ってみると、よく続いたなあ、と感慨深い。毎年、新緑の季節になると、バスの車窓から美しい丘陵を眺め、自然に恵まれた環境に職場のあることを嬉しく思ったものである。

一番大変だったのは、新任ですぐに一年生必修の日本史概説を担当したことである。日本史・東洋史・西洋史・考古学・地理学の五コースに分かれる前の、史学科一年生全員が対象で、高校で日本史を履修していない学生も多い。日本史コース志望であっても、「戦国時代が好きでこの学科にきたので、他の時代には興味ない」と公言する学生も少なくない。そんな中で、古代から近現代までの基本的論点をとりあげ、学問としての日本史の基礎を一年間かけて教えるということ、二〇〇七年度まで続けた。それまでは諸大学兼任の非常勤講師として、自分の専門とする日本古代史の話だけをしていれば良かったので、大違いである。近世の「寺子屋」を堂々と「寺小屋」と板書したり、近代の日清・日露の年代を間違えて授業のあと学生に指摘されて翌週に謝ったり、数年間はそんなことの連続だった。

しかし、そこで苦勞して良かったと思う。おかげで、どんな問題についても、歴史の長いスパンで考え、大きな流れをつかみ、具体的資料を提示して明快に説明する、という訓練を重ねることができた。古代史の専門分野だけに閉じこもっていたのでは、見えてこなかったことである。同様に、選択必修科目の家族史も、古代から現代にいたる家族の歴史を一年間かけて語ることを、これは初年度から最終の今年度まで二二年間つづけた。日本の家族史が中心だが、折にふれて中国・朝鮮・インドなどの話を比較の意味で交えたこともある。オープン科目として他学科の学生も受けるので、日本史の難しい史料はかみくだき、常に現代の家族、学生自身の将来の家族について考える時の手がかりが得られるよう、こころがけてきた。

学問の進展を数量的に計測することはできないが、私はこの大学に赴任してから多くの著作をまとめることができた。地道な学究タイプの教員が多い、落ち着いた史学科の環境のおかげと、深く感謝している。同時に、

一六年間つづけた日本史概説、それに引き続く史学概論、そしてずっと担当しつづけた家族史で、幅広い勉強を否応なくさせられた(?) おかげでもある。その間に自分の研究テーマも系譜、祭祀、女帝、王権、神話へと広がってきて、そのどれにおいても長いスパンで問題を考えるクセがついたように思う。

学生に授業をするにあたっては、学び方を具体的に伝えること、思考力を高めることを一番の目標にしてきた。史学科の学生は歴史好きで、他学科に比べて勉強へのモチベーションが高いと言われる。その通りなのだが、勉学のやり方をしらないために折角の意欲をのばすことができない、授業を真面目にききノートをとるだけで四年間終わってしまう、あるいは自己流のやり方で読み易い本ばかり読んで深く考えようとしない、という例を多々みてきたからである。

思考力をきたえる工夫の一つとして、講義式の授業(今年度でいうと、日本史特殊講義・家族史・日本政治思想史の三科目)では、春期・秋期のそれぞれに中間と期末の二回、論述式試験を行い、翌週に答案の中からえらんだ模範解答をコピーして配り、授業内容の確認をするとともに論述式答案の書き方について解説する、ということをし繰り返してきた。そのため、期末試験は最終週ではなく最終前週に行うことになる。数年前からはそれに加えて、答案を一たん返却し、模範解答の解説をしたあと、学生に自己添削(どこが不十分だったかを自分自身で振り返る)をして再提出させる、ということを行ってきた。試験は学生をふるい分けるためではなく、学習の成果を確認し、学生自身がそこから前進するためのもの、と思うからである。最終回に試験をしたのでは、答案を出しっぱなしでどこが悪かったのかもわからず(考えず)、一〜二ヶ月も経ってから成績評価をみて一喜一憂するだけ、になってしまう。

この秋の家族史の中間試験では、自己添削の最後に、「論述のやり方で学んだ一番大事なことを三〜四行書いてもらった。その中から数点を紹介して、二二年間の「教えと学び」を振り返る拙文の結びとしたい。

1. 論述の説明は、あれこれ色々なことを書けばよいというものではない。じぶんなりに、内容を整理し、まとめれば、文章は見やすくわかりやすいものになるとわかった。短く具体的に述べるのが大事だと思った
2. 前置き・本論・結論を読者に伝えるよう、正確に的確に表示することが大切だと思った。そしてなにより、私見を持って、それを学んだ証に伝えることが大切だと思った。
3. やはり、「私見」である。解説・説明することも重要であるが、その上で、私見も加えなければならぬ。私見を加えることで、全体的に美しく、まとまった引き締まった文章（論述文）になる。
4. わかっていることをただ書くのではなく、わかりやすい順番内容に書きかえることが大事だと思う。一度自身で理解し、そこから言葉にすることが文章をわかりやすくするコツのように感じた。
5. 「私見」は感想ではないということ。自分自身の意見を書くこと。

教師は、学生自身が伸びていくための手がかりを提供する「種まき人」である。そして、種をまきながら「これで良いのだろうか」と自問自答し、教師自身も成長する。そんな当たり前のことを実地に学び、間違っても教師にだけはなるまいと思っていた（教壇にたつのが怖かった）私が、まがりなりにも二二年間の教師生活をまっとうすることができた。ありがとうございました。